私がなぜ現在の科目を選んだか

「理学療法学」

信州大学医学部保健学科理学療法学専攻
西　澤　公　美

保健学科の教員となった立場では申し上げにくいのですが，私が学生だった頃は，理学療法士がどんな職種なのかよくわかっていませんでした。歩けない人を歩けるようにする仕事，というイメージを持っていたくらいです。ただ私にとっては未知で興味を惹かれる領域でした。クララが立った某アニメを見ても何の感動もありませんでしたが，病気で歩けなくなった人が本当に歩けるようになるのであれば凄いことだと思っていたからです。そして，なぜ歩けるようになるのか知りたいという気持ちだけで理学療法を選びました。しかしながら答えは就職してからも見えてきませんでした。就職当時，病院の年末年始は必ず６連休以上でその間の理学療法はお休みになりましたが，年明けに会った患者さんが年末よりも上手に歩いていた時はショックで（喜ばしいことですが），どう考えてよいかわかりませんでした。理学療法の効果が残っていたのか？自然に治ったのか？薬が効いているだけなのか？その全てなのか？今度はその点を知るために大学院へ進みました。そこでわかったことは，理学療法分野のエビデンスが医師と比べてとても少ないということです。エビデンスが少ない状況ではわからないことが多いのも当然です。一方，なぜ歩けるようになるのかに対する答えはグレーなままです。おそらく，理学療法も自然治癒も薬もすべてが要因なのでしょう。なんだか医学の進歩の速度に理学療法が取り残されているようにすら思えます。ここで原稿を終えると理学療法士の印象を悪くしてしまいそうなので，１つ医師にも負けていないと思える点を挙げます。患者と接する時間の厚さです。彼らから学ぶものは多く，彼らのために研究をしたいと思う気持ちは今も私の原動力となっています。エビデンスを積み上げながら，今後は医師の先を行くような理学療法時代をつくりたいものです。それにしても学生の頃の私の疑問は意外と難問でした。

（信大大学院平30年卒）

私がなぜ現在の科目を選んだか

「児童精神科」

信州大学医学部附属病院子どものこころ診療部
公　家　里　依

私がこころに興味を持ち始めたのは高校生の頃でした。心理学がテレビなどで注目されていた影響もありましたが，最も影響を与えたことは，高校でフロイトやユングが登場する倫理を教えてくださっていた先生の授業が非常に興味深かったことのように思います。そこから「なぜ精神的不調をきたすのか」というメカニズムを探求したいと考え，大学で心理学を勉強することを選択しました。しかし徐々に，メカニズムを知った上で実際に苦しんでいる方の援助に携わりたい，こころだけでなく，からだについても幅広く勉強して精神科医になりたいと思うようになり，医学部編入を決意しました。

精神科医になりたいという思いは編入後も揺らぐことはなかったのですが，ポリクリの小児心身症，児童精神科の領域で，子どもたちが困難を乗り越えていくことができるよう抱え，成長発達を見守る先生方の姿をみて，子どものこころを専門にしたいと考えるようになりました。

子どものこころを専門にする場合，小児科，精神科のどちらに軸足を置くのか，という悩みを持たれる方が少なくないと思います。私自身も悩みましたが，子どもたちのこころが不調になったとき，からだの不調として表現しSOSをだすことがあること，こころからからだまでみることができる子どもの専門家でありたいという思いがあったことから，小児科から始め，その後に児童精神科の後期研修を修了し，最終的に児童精神科医として働くことを選択しました。研修期間が長くなることに不安は感じましたが，新生児科から成人の精神科までの幅広い研修で様々な知識，技術を学ぶ機会をいただけたことはもちろん，じっくり焦らず歩んでいく経験をしたこと，多くの指導医の先生方と出会い，先生方の臨床に対する姿勢が内在化されていったことが自身の現在の臨床の土台になっていると思っています。

これからも出会う子ども，その家族が少しでも楽に生活を送ることができるよう影ながら援助ができるように，日々精進していきたいと思います。

（岡山大平18年卒）